

鎖骨下動脈病変に対するステント留置術

望月洋一¹、赤路和則¹、木村浩晃³、志藤里香¹、神澤孝夫²、谷崎義生¹、美原盤³

1 脳血管研究所 美原記念病院 脳神経外科

2 脳血管研究所 美原記念病院 脳卒中部門

3 脳血管研究所 美原記念病院 神経内科

【はじめに】

鎖骨下動脈狭窄または閉塞に対する治療は血管内治療が第一選択とされている。直達手術よりも血管内治療は侵襲が小さく、合併症も少ないことがその理由であり、当院でも血管内治療を第一選択に行っている。当院での鎖骨下動脈病変に対する治療をまとめ、報告する。

【方法】

2001年2月から2016年6月に血管内治療を行った鎖骨下動脈狭窄症および閉塞症11例を対象に患者背景および治療方法、治療結果を検討した。

【結果】

平均年齢71歳(52-84歳)で男性10例、女性1例であった。病変はすべて左であり、狭窄が6例、閉塞が5例、症候性が6例であり、上肢のしびれ、失神が主な症状であった。Approachは経上腕が6例、経大腿が5例であった。9例で治療に成功し、使用したステントの種類は、Palmaz stent5例、Palmaz Genesis stent2例、Express vascular LD1例、Assurant stent1例であった。閉塞例のうち2例はlesion cross困難なため治療を完遂できなかった。そのうち1例は血管解離を生じたが無症状であった。その他に合併症を認めなかった。術後strokeはなかった。再狭窄を1例に認め、PTAを行った。

【結語】

鎖骨下動脈病変に対するステント留置術について報告した。lesion cross困難な症例もあったが、鎖骨下動脈ステント留置術は有用であった。

演題登録番号：2016J-0494 nougekaisi